

廣福寺だより

2020年1月



親子報恩講での集合写真

皆様あけましておめでとうございます。
私（住職）は今年の年賀状に、こんなことばを書きました。

米には八十八の

手間がかかっているという

私が今の私になるために

どれだけの手間が

かかってきたのだろうか？

今、家族とともに心から感動して新年を迎えている人たちは、どれくらいいるのでしょうか。

昔は年取りの晩の塩引き鮭、正月のもちを、みんなで喜びとともに味わったといいます。貧しくつらいことの多い時代であっても、ひとつのミカンのおいしさ、母の編んだセーターのぬくもり、炉端につどうことで笑顔になれる時間がありました。

今、この時代に見えなくなっているのは、手間がかかっているものの有り難さです。当たり前に見える私たちのいのちが実は一番手間がかかっているものではないでしょうか？

報恩講法要

十一月七日（木）に報恩講が勤まりました。喚鐘に続き、住職登壇での舌々正信偈六首引のお勤めを行い、報恩講の御勸章を拝読いたしました。

お勤めの後、出雲崎・万因寺御住職の高橋速円師に法話を頂戴しました。

それ有為転変の世のならない きのうきよう淵瀬とかわりゆくありさま何か常ならんや 人間の命も一息のしたにせまるものをや とみに急ぎたきは後生の一大事なり
（「御勸章」）

今私たちは自然災害や重大事件をはじめとする大きな時代の変化の中に生きていると言われます。その時代の変化の中で大変だ大変だと慌てるのではなく、お念仏の教えを信じてこの人生を全うしていけるのかどうか、これが大変な問題だと思えます。

親鸞聖人の生涯の中で改元は実に三五回もありました。災害の度に改元されたわけです。その生涯で一人の人間が助かる道とはなにか、何のために生きているのか、大変な問題を目の当たりにされ、考え抜かれていかれたのが親鸞聖人です。私は父の死をきっかけにお寺に戻ってきました。その縁がなければ今の私はこ

うして存在しない。何のために生きるのか、この根本をはっきり問うていく人生を歩ませてくれた縁でした。

『大経』のなかに、「無有代者」ということばがあります。私はあなたの代わりにはなれないし、あなたは私の代わりになることもできない。代わることできかない人生をみんなが生きているという事です。どうしようもない事実の前でいのちというものの重さ、ありがたさ、ここをきっちり受け止めていかなければなりません。

「念仏者は愚者になりて往生す」という法然上人のことばがあります。物知り顔で念仏するのか、愚直なまでに念仏一本を信じていくのか。親鸞聖人は「念仏しか知らないのか」とか、「行もしないで往生できるのか」と世間の人々に言われても念仏一つをいただき、それに頷いがかれた。

先にも申しましたが後生の一大事。何のために生きるのか、私はどうなるのか。この問題にうなずけるようになることが重要なのです。お念仏の世界に出会う事でなんとかぶれずにこのいのちを全うしていけるとしみじみと思えます。

『阿弥陀経』ではお浄土は十万億の彼方にあると説かれています。実は気が付けば私のすぐ隣にある。そのことに気付けてくれるのは阿弥陀様のはたらきなのです。肝心のこの私はどこまでいっ

ても自分さえ良ければの連続で来ていますから、気付いていなかった。しかし気付かない私がいても絶えずはたらきかけてくださるのが阿弥陀様なのです。皆様方もお念仏の日暮らしをよるこべる毎日を送っていただきたいと思います。

（法話より一部抜粋）



報恩講御仏供米御礼

報恩講に際しまして御仏供米をいただきました。心より御礼申し上げます。

- | | | | | | | | |
|--------|--------|-------|--------|------|--------|------|------|
| 麓 | 麓 | 麓 | 山崎 | 長崎 | 長崎 | 吉田 | 勘助郷屋 |
| 木村郷左エ門 | 近山五左エ門 | 山岸与一郎 | 石井政右エ門 | 松井長七 | 松井辰左エ門 | 武石元助 | 松宮信一 |
| 様 | 様 | 様 | 様 | 様 | 様 | 様 | 様 |

女性講

十一月十二日（火）に女性講が勤まりました。月瀉・梵行寺御住職の木村俊尚師にお越しいただき、ご法話をいただきました。

無明長夜の灯炬なり 智眼くらしとかなしむな 生死大海の船筏なり 罪障おもしとなげかざれ （「正像末和讃」）

我々の生活の中において、事実の奥にある真実というのとは場合によって違うことがあります。例えば怒るということに関しても、怒る側は相手を思って厳しくしたつもりでも、怒られた側は怒られた事実しか残らない。事実の裏にある背景を知らないのが無明と言えます。生活が豊かになるとそういうことが見えにくくなる、それが智慧に暗いということですから。先人の苦労だとか努力とかもそうです。歳を重ねて九十歳近くになっても、耳が聞こえないだとか、腰が痛いだとか愚痴ばかり出てくる人生ではなく、苦労もあつたけどおかげさまでここまで生きられたと言える人生、尊さを感じられる人生というものに出遇っていただきたい。作家の高史明（コ・サミョン）さんの話ですが、一人息子が中学生になるときに、「人に迷惑をかけなければもう大人

分で責任をもって生きなさい」という事を話したそうです。ところが、よかれと思っただけの言葉には大事なことが見落とされていましておっしゃっています。他人に迷惑をかけずに生きてこれた人がいるのだろうか、この先他人に迷惑をかけずに生きていくことができるだろうか。他人の厄介になりながらしか生きられない現実には私たちはどう向き合っていくか。一人で生きていけると勘違いしている私たちの在り方が無明と言えるのです。勘違いしたものを見方、自分の目には誤りがないと思いきむことを『大経』では悪業と説かれています。

人間のものの見方には五つあると言われます。一つには肉眼です。前方は見えるが後方は見えない。外側は見えても内側は見えない。表の部分だけで本心は見えない、自分中心のものの見方です。

二つには天眼です。これは肉眼の世界を超えてそのものの本質を見抜いていく眼です。将来に渡って何が大切なのかを見通していく眼のこと。

三つめは慧眼です。自分自身を知る眼のこと。他人から自分のことを言い当てられると腹を立てますが、そのありのままの姿を直視していく眼。正体不明のわたし（凡夫）が、浄土への呼びかけを感得していく眼。

四つ目が法眼です。これは菩薩の眼。相手の苦しみや悲しみを理解してあげ、

何とかしてやりたいと努力精進する眼。五つ目は仏眼です。すがたが見えなくても心の通い合う世界とも言えます。春そのものを眼で見ることができないがその存在は感じ取っていきけるのと同様です。未だかつてない長寿社会を経験し、その社会で生きていく中で、互いに厄介を掛けながら、支えてもらいながら生きていく人生というものによる喜びや満足というものをいただきながら、出遇えて良かったなと思えるような生き方、智慧の眼をこの身にいただきながら生活していただければと思います。

（法話より一部抜粋）





6年生の代表が阿弥陀様にお供えしました

親子ほうおんこう&もちつき

十一月十六日(土)に親子ほうおんこうともちつきを行いました。

正信偈のお勤めののち、西蒲区井随・法讚寺御当院の雲郷真師にご法話をいただきました。童話『さるかに合戦』のお話を引用し、途中四択クイズを挟みながら阿弥陀さまのお話をしてくださいました。

恒例のもちつきも大盛況でした。今年の高記録は八個完食でした。

もちつき指導をして頂いた近山富士弥様、唐澤仁様、武石豊様、合い取りをして頂いた近山フミ様、当日お手伝い頂いた保護者の皆様、大変ありがとうございました。厚く御礼申し上げます。



行事案内

- ◆ 3/9 (月) 梵鐘講・本山差向布教
- ◆ 3/15 (日) 涅槃会

※詳細はまたチラシでご案内いたします

★広大会今後の予定★

1/25(土) 9時
お正月のあそび

2/15(土) 9時
ブーメラン作り

3/14(土) 9時
修了式&パンケーキ作り



発行者 広福寺 〒959-0318 新潟県西蒲原郡弥彦村麓6590 ☎0256942437

